札幌保健科学雑誌　第７号　31－37（2018）

研究報告

周手術期看護実習における手術室見学実習での学生の学び

大塚知子，牧野夏子，城丸瑞恵，澄川真珠子，仲田みぎわ

札幌医科大学保健医療学部看護学科

本研究の目的は，周手術期看護実習における手術室見学実習を通して振り返った実習レポートから，学生の学びを明らかにし教授活動への示唆を得ることである．対象はＡ大学で手術室見学実習を行った47名のうち同意が得られた44名の学生の実習レポートである．実習レポートに記載された学びを理解，気づき，実施ごとに質的帰納的に分析を行った．学生の学びは，理解が【手術室看護師に必要な合併症予防の実践】【患者の不安緩和を目的とした手術室看護師が行う心理的援助】など5カテゴリー，気づきが【手術を受ける患者の心理的状態】【手術室看護師に求められる役割と能力】など10カテゴリー，実施は【受け持ち患者の緊張緩和を目的とした看護援助】の1カテゴリーとして抽出された．学生は術中看護を術前から術後の継続看護の一環として捉えることができていた．今後は，臨床指導者と協力し学生が手術室で体験できる援助内容を検討していく．

キーワード：周手術期看護実習，手術室見学実習，看護学生，学習内容，学び

Students´ learning from operating room observation practice as part of perioperative nursing training

Tomoko OTSUKA, Natsuko MAKINO, Mizue SHIROMARU, Masuko SUMIKAWA, Migiwa NAKADA

Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

The aim of this study was to clarify what students learn from operating room observation practice as part of perioperative nursing training through reports looking back on their experiences. The study targeted the training practice reports of 44 nursing students at A University who took part in operating room observation practice and gave their consent, out of 47 students who took part. A qualitative recursive analysis was conducted for understanding, awareness, and execution of the learnings described in the nurses´ training practice reports. A total of 5 categories including "practices required for operating room nurses to prevent complications" and "emotional support methods for operating room nurses seeking to alleviate patients´ anxiety" were extracted as students´ understanding. A total of 10 categories including "the mental state of patients receiving surgery" and "the roles and abilities required for operating room nurses" were extracted as lessons for awareness. "Nursing support aiming to alleviate patients´ nervousness as they wait for surgery" was the one category extracted as a learning for execution. They were able to grasp intraoperative nursing as a part of continuous nursing from preoperative to postoperative care. In the future, we will consider the contents of assistance that nursing students can experience in the operating room in cooperation with clinical leaders.

Key words：Perioperative nursing training, Operating room observation practice, Nursing students, Learning content, Learning

Sapporo J. Health Sci. 7：31-37(2018)
DOI：10. 15114/sjhs. 7. 31

受付日：2017年10月25日　　受理日：2018年２月２日

＜連絡先＞　大塚知子：〒060-8556　札幌市中央区南1条西17丁目　札幌医科大学保健医療学部看護学科

Ⅰ．はじめに

近年の手術や麻酔技術の進歩・向上，地域における医療や支援の拡充により，在院日数の短縮とともに手術を受ける患者の早期退院が可能となっている．また，医療費の抑制に伴う急性期入院医療を対象とした包括評価制度やクリニカルパスを導入する病院が増加している．このような病院全体の急性期化により看護基礎教育における臨地実習の在り方の変革が迫られ，看護学生には短期間の関わりの中で対象を理解し，アセスメントを行い，必要な看護支援を行うことが求められている．特に，周手術期看護実習では，短期間で手術侵襲を受ける患者の日々変化する状態のアセスメントを行い，看護を展開し，実践していかなければならない．学生が手術を受ける患者を理解する方略の一つに，手術室実習の有効性が報告されている[1]．しかし，学生は手術室実習に否定的なイメージや緊張，不安を抱く[2]という報告がある．2005年の全国公立看護系大学における手術室実習の動向[3]によると，手術室実習は約80％の大学で成人看護学実習の中に組み込まれた見学実習が主体となる実習形態で実施されていた．その中で，手術室実習の必要性について大学教員の25％が不必要と考えており，その理由としてカリキュラム上の問題だけでなく，看護基礎教育では手術室看護を理解するのは無理であると考えていることが示された．このことから臨地実習における手術室実習の学習効果を上げる指導方法の検討は重要な課題であると推察される．

Ａ大学では，周手術期看護実習の一環として受け持ち患者の手術見学を行っている．手術室実習の効果として，学生は手術が及ぼす侵襲を直に見て感じることにより手術が及ぼす侵襲を現実のものとして理解ができること[4]や学生自身が術中に観察した事柄から術後の援助や観察を行う必要性に気がつくこと[5]が報告されている．看護基礎教育において学生が手術室看護を理解することは難しいと言われている一方で，手術室実習は周手術期の患者を理解し看護する上では必要であると考える．

そこで，本研究では，周手術期看護実習における手術室見学実習において学生がどのようなことを学んでいるかを明らかにし，今後の実習での学習効果を高めるための教授活動を検討する一助とする．

Ⅱ．研究目的

手術室見学実習における学生の学びを実習レポートから明らかにし，今後の教授活動への示唆を得ること．

Ⅲ．用語の定義

学び：実習レポートには手術室見学実習での学びとして「理解したこと」「気がついたこと」「体験したこと」を記載するよう実習前に学生へ説明していることから，手術室見学実習終了後に提出された実習レポートの中で学生が「理解した」「気がついた」「体験した」と表現している内容とした．

Ⅳ．研究方法

1．研究デザイン

質的記述的研究デザイン

2．データ収集期間

平成28年6月～7月

3．研究対象

Ａ大学で平成27年度に急性期看護実習を終えた看護学科3年生47名のうち，同意が得られた学生の手術室見学実習の実習レポートに記載された学びとした．この実習レポートは，急性期看護実習の最終日に受け持ち患者の看護過程等の記録物とともに提出される．実習オリエンテーション時に，実習レポートは手術室見学実習における自己の学びや課題を振り返る記録であり，「理解したこと」「気がついたこと」「体験したこと」を記載すること，字数制限はなくA4版1枚程度で記載することを学生に説明している．

4．実習の概要

Ａ大学では3年次後期に急性期看護実習として，周手術期の看護を学ぶ機会として外科系病棟での周手術期看護実習と救急看護を学ぶ機会として集中治療室または高度救命救急センターのどちらか一方での見学実習を行っている．周手術期看護実習では，外科系病棟において3週間の実習を実施し，外科的療法を受ける患者1名を受け持ち，臨床指導者の指導のもと周手術期における看護を実践する．周手術期看護実習の一環として，受け持ち患者が受ける手術・麻酔侵襲について理解を深め術後の看護に活かすとともに，チームアプローチおよび継続看護の実際を学ぶことを目的に受け持ち患者の手術室見学実習を実施している．手術室見学実習は，原則，実習時間内での受け持ち患者の手術室入室から退室までの見学とし，教員は引率せず実習指導は手術室看護師が担っている．実習時間内に手術を見学することが出来ない場合は，可能な限り同じ術式で手術を受ける患者の手術見学を行っている．

5．データ収集方法

急性期看護実習の成績評価および単位認定が終了した後，研究協力を依頼した．研究協力の同意が得られた学生の実習レポートを保管している実習担当の教員より回収し，複写した．複写した実習レポートは学籍番号，氏名を削除し個人が特定されないよう連結可能匿名化を行った．

6．分析方法

実習レポートについて研究デザインを基に以下の手順で帰納的に分析を行った．

① 実習レポートを精読し，「理解したこと」「気がついたこと」「体験したこと」と記載された実習での学びに関する文節または文脈を抽出し，「理解」「気づき」「実施」に分類した．

② 分類毎に抽出した文節または文脈の意味内容が損なわれないよう簡潔な文章に表現し，1次要約とした．

③ 1次要約を意味内容が損なわれないよう簡潔な一文に表現し，2次要約とした．

④ 2次要約を類似性に基づきサブカテゴリー，カテゴリーに集約した．

7．分析の信頼性の確保

分析の過程において，質的研究の経験が豊富な研究者からスーパーバイズを受けることにより，分析結果の信頼性を確保するように努めた．

8．倫理的配慮

3年生の全ての実習が終了し，成績が確定した後に対象者となる学生が全員揃っている場で，研究の目的，方法，プライバシーの保護，研究に協力しない場合であっても成績評価等に影響が生じないことについて文書および口頭で説明し，同意書の提出をもって同意を得た．なお，同意書の提出後2ヶ月の間は同意撤回書をもって撤回が行えることを保証した．研究の実施に際しては，所属機関の倫理委員会の審査を受け，承認を得た．（承認番号27-2-61）

V．結　　果

1．分析対象

手術室見学実習を行った47名のうち同意が得られた44名の実習レポートであった．

2．手術室見学実習における学生の学び

分析の結果，「理解」は5カテゴリーに，「気づき」は10カテゴリーに，「実施」は1カテゴリーに集約された．以下，各カテゴリーについて示す．なお，本文中のサブカテゴリーは「　」，カテゴリーは【　】を用いて表現した．

1）理解

手術室見学実習を通して学生の理解したことは123の2次要約，23サブカテゴリー，5カテゴリーに集約された．カテゴリーおよびサブカテゴリーは表１に示した．

(1)【患者の人生に影響を及ぼす手術療法の特徴】は「手術を受けた患者は術前との変化を実感し受容のプロセスを辿っていくため，患者にとって手術は人生が大きく変わるものであると理解した」のサブカテゴリーからなり，手術療法が患者の人生に与える影響についての理解として示された．

(2)【手術室看護師に必要な合併症予防の実践】は「長時間の手術侵襲や同一体位に伴う褥瘡や神経障害を予防するための援助を行っていることを理解した」など6サブカテゴリーからなり，手術侵襲や手術操作による合併症を予防するための援助についての理解として示された．

(3)【患者の不安緩和を目的とした手術室看護師が行う

表１　看護学生の手術室見学実習の学び：理解

カテゴリー	サブカテゴリー
患者の人生に影響を及ぼす手術療法の特徴	手術を受けた患者は術前との変化を実感し受容のプロセスを辿っていくため，患者にとって手術は人生が大きく変わるものであると理解した
手術室看護師に必要な合併症予防の実践	長時間の手術侵襲や同一体位に伴う褥創や神経障害を予防するための援助を行っていることを理解した 手術侵襲による低体温の影響を最小限にするため様々な器材を用いた体温管理が重要だと理解した 患者の安全を守るために患者誤認や体内遺残を確実に防ぐことが重要だと理解した 感染予防のため清潔・不潔を意識した行動を行う必要があると理解した 手術を安全・円滑に行うため手術に使用する物品を正確に準備する必要があると理解した 患者の状態が変動しやすいため異常の早期発見に向けた細やかな観察を行う必要があると理解した
患者の不安緩和を目的とした手術室看護師が行う心理的援助	患者の代弁者となり安全・安楽を守るための援助を行っていると理解した 外回り看護師は手術への不安を緩和するため患者の個別性に合わせた声かけやタッチングを行っていることを理解した 術前訪問は患者の安心感や信頼関係構築に繋がるため看護師・患者ともに有益であると理解した
手術侵襲に対応し得る手術室看護師の能力	手術・麻酔は患者にとって侵襲が大きいため患者の生命を守るという意識を持つことが重要であると理解した 手術中のいかなる状況にも対応できるよう手術や麻酔，合併症に関する知識が必要だと理解した 手術・麻酔によって生じる心身への影響を予防するために臨機応変な対応力と判断力が必要だと理解した 手術中は医師からの口頭指示が多いため高い集中力が必要であると理解した 器械出し看護師は手術時間を短縮し患者の負担は軽減するため必要物品を迅速に渡す必要があると理解した 外回り看護師は手術が円滑に進行できるよう環境調整を行っていることを理解した
円滑な手術進行と安全を考慮した医療者間の連携	手術が安全に行われ手術侵襲が最小限となるためにチーム医療が重要だと理解した 様々な職種が関わる手術を円滑に行うため医療者間の連携が必要だと理解した 手術を円滑に行うため器械出し看護師と外回り看護師の連携が不可欠だと理解した 病棟，手術室での看護を継続し個別性のある看護援助を行うため手術室と病棟看護師の連携が重要であると理解した 手術は医療者間の信頼関係が求められるためコミュニケーションが大切だと理解した 円滑な連携を図るため手術室看護師は各職種の役割を把握する必要があると理解した 患者の安全を守るため各職種が専門的な視点から起こりうる危険を予測して対応していると理解した

心理的援助】は「外回り看護師は手術への不安を緩和するため患者の個別性に合わせた声かけやタッチングを行っていることを理解した」など3サブカテゴリーからなり，手術を受ける患者の不安緩和に向けた援助についての理解として示された．

(4)【手術侵襲に対応し得る手術室看護師の能力】は「手術・麻酔によって生じる心身への影響を予防するために臨機応変な対応力と判断力が必要だと理解した」など6サブカテゴリーからなり，手術室看護師に求められる態度や能力についての理解として示された．

(5)【円滑な手術進行と安全を考慮した医療者間の連携】は「手術が安全に行われ手術侵襲が最小限となるためにチーム医療が重要だと理解した」など7サブカテゴリーからなり，医療者間の連携の重要性についての理解として示された．

2）気づき

手術室見学実習を通して学生が得た気づきは，300の2次要約，42サブカテゴリー，10カテゴリーに集約された．カテゴリーおよびサブカテゴリーは表２に示した．

(1)【手術を受ける患者の心理状態】は「手術を受ける患者はコントロール感覚の喪失など心理状態に影響を受けることに気がついた」など3サブカテゴリーからなり，手術を受ける患者の緊張や不安という心理状態についての気づきとして示された．

(2)【合併症を予防するための手術室看護】は「褥瘡や神経麻痺を予防するための援助を行っていることに気がついた」など5サブカテゴリーからなり，手術室で行われている合併症予防に対する看護援助についての気づきとして

表２　看護学生の手術室見学実習の学び：気づき

カテゴリー	サブカテゴリー
手術を受ける患者の心理的状態	手術を受ける患者はコントロール感覚の喪失など心理状態に影響を受けることに気がついた 手術室の環境は患者に緊張やストレスを与えると気がついた 手術室に入室した患者は緊張や不安を抱えていることに気がついた
合併症を予防するための手術室看護	褥瘡や神経麻痺を予防するための援助を行っていることに気がついた 患者の低体温を予防するための体温管理に努めていることに気がついた 手術による患者への影響を最小限にするための援助を行っていることに気がついた 使用物品を確認し体内遺残による医療事故を防止していることに気がついた 外回り看護師は患者の急変のリスクを予測して観察を行っていることに気がついた
手術室で実施される感染予防対策	手術の清潔操作には医療者間の連携が重要だと気がついた 清潔・不潔を意識して行動していることに気がついた 手術室では徹底した感染予防が行われていることに気がついた 手術室では清潔野が明確に区別されていることに気がついた
患者の個別性に合わせた心理的援助	外回り看護師は処置のタイミングや患者の状態を観察しながら不安軽減に向けた援助を行っていると気がついた 術前訪問で得た情報に基づいて個別性のある援助を行っていると気がついた 患者の露出を最小限にして羞恥心に配慮した支援が必要であると気がついた 手術室でも患者の理解と納得のもと医療が行われていることに気がついた
手術室看護師に求められる役割と能力	患者の安全・安楽，生命を守るという責任があると気がついた 臨機応変な判断力や対応力が必要であると気がついた 手術が円滑に進行するためにサポートする役割があると気がついた 体力や気力が必要であると気がついた 患者の状態を観察しアセスメントする能力は全ての看護師に求められる能力であると気がついた 手術や合併症に関する幅広い知識が求められると気がついた 外回り看護師は安全に手術が進行するための環境調整を行っていることに気がついた 器械出し看護師は使用する器械を予測して準備していることに気がついた
他職種の役割を理解する必要性	手術に携わる医療者は互いの役割を理解した上で連携する必要があると気がついた 手術に携わる医療者が連携して役割を果たすことでチーム医療が実践されていることに気がついた 器械出し看護師と外回り看護師が互いの役割を果たすことで，手術が円滑に行われると気がついた
他職種連携におけるコミュニケーションの重要性	手術では多くの職種が連携・協働していることに気がついた 医療者間でコミュニケーションをとりながら連携していることに気がついた 医療者間で患者の情報を共有することで手術中の迅速な判断ができるのだと気がついた 器械出し看護師と外回り看護師はコミュニケーションを取りながら連携することで，患者の安全を守っていることに気がついた
看護師の連携がもたらした継続看護	手術室看護師と病棟看護師が連携することで継続看護が提供されると気がついた
手術侵襲による術後合併症の予測と術後看護	手術を受ける患者は手術侵襲により身体へ大きな影響を受けることに気がついた 手術侵襲による術後合併症に対する援助を検討する必要があると気がついた 皮膚障害や神経麻痺の観察を術後も継続して観察する必要があると気がついた 手術室から帰室する際は，保温や除圧を行う必要があると気がついた 手術による身体機能の変化に対する生活への影響について看護する必要があると気がついた 手術を受けた患者に対しては身体だけでなく精神的な回復支援が必要であると気がついた
全ての看護に共通する患者を尊重した姿勢	患者を中心とした安全・安楽・自立・自律を守り尊重した関わりは，病棟での看護と同じであることに気がついた 意思疎通ができない患者に対しても尊重する姿勢が大切だと気がついた 患者の気持ちに寄り添った看護を行うことは病棟での看護と同じであると気がついた 責任をもって行動するという手術室看護の考え方は全ての看護に共通することだと気がついた

示された.

(3)【手術室で実施される感染予防対策】は「清潔・不潔を意識して行動していることに気がついた」など4サブカテゴリーからなり，手術時の清潔操作や手術室の清潔を保つ環境についての気づきとして示された.

(4)【患者の個別性に合わせた心理的援助】は「外回り看護師は処置のタイミングや患者の状態を観察しながら不安軽減に向けた援助を行っていると気がついた」など4サブカテゴリーからなり，手術室看護における個別性のある心理的援助についての気づきとして示された.

(5)【手術室看護師に求められる役割と能力】は「患者の安全・安楽,生命を守るという責任があると気がついた」など8サブカテゴリーからなり，外回り看護師や器械出し看護師という手術室看護師の役割や能力の気づきとして示された.

(6)【他職種の役割を理解する必要性】は「手術に携わる医療者は互いの役割を理解した上で連携する必要があると気がついた」など3サブカテゴリーからなり，チーム医療を実践するための他職種理解についての気づきとして示された.

(7)【他職種連携におけるコミュニケーションの重要性】は「医療職間で患者の情報を共有することで手術中の迅速な判断ができるのだと気がついた」など4サブカテゴリーからなり，職種間連携やコミュニケーションの必要性についての気づきとして示された.

(8)【看護師の連携がもたらした継続看護】は「手術室看護師と病棟看護師が連携することで継続看護が提供されると気がついた」のサブカテゴリーからなり，看護師間の連携による継続看護の実際についての気づきとして示された.

(9)【手術侵襲による術後合併症の予測と術後看護】は「手術による身体機能の変化に対する生活への影響について看護する必要があると気がついた」など6サブカテゴリーからなり，手術侵襲による合併症を予測し，予防するための術後の観察や看護の視点についての気づきとして示された.

(10)【全ての看護に共通する患者を尊重した姿勢】は「意思疎通ができない患者に対しても尊重する姿勢が大切だと気がついた」など4サブカテゴリーからなり，看護師として患者を尊重する姿勢や関りについての気づきとして示された.

3）実施

手術室見学実習を通して学生が実施した援助は2の2次要約，2サブカテゴリー，1カテゴリーに集約された.

(1)【受け持ち患者の緊張の緩和を目的とした看護援助】は「患者の緊張を緩和しようと手術直前まで声をかける援助を行った」「患者が安心して麻酔を受けられるよう手を握る援助を行った」の2サブカテゴリーからなり，学生が患者の緊張緩和を目的として行った援助として示された.

Ⅵ. 考　　察

1．手術室見学実習での看護学生の学び

本研究で明らかになった結果を基に，手術室見学実習での看護学生の学びを以下の6つの視点で述べる.

1）手術を受ける患者の特徴

学生は【手術を受ける患者の心理的状態】として患者の緊張やストレスに気づいた．これは，受け持ち患者と共に手術室に入室することで，患者の表情や言動の変化から心理状態を捉えることに繋がったと考えられる．手術は患者にとって自分のコントロールの働かない状況で医療者にすべてを任せざるを得ないという感覚を生みだす．学生は手術室という特殊な環境やそこで行われる医療，患者の表情や言動から，手術を受ける患者の心理状態としてコントロール感覚を喪失すると気がついた．また，【患者の人生に影響を及ぼす手術療法の特徴】として，手術を受ける患者が術前との変化を実感し受容のプロセス辿っていくことを理解したことが示された．学生は術前・術中・術後という経過の中で患者の身体的，心理的変化を理解し患者を中心とした周手術期を捉えることができたと考えられる．手術室見学実習は学生の漠然としていた手術後患者のイメージを体験の中で再認識する場となる[6]と報告されており，受け持ち患者の手術見学を通して周手術期にある患者の特徴を学んだと推察される.

2）手術室で提供される看護援助

学生は【合併症を予防するための手術室看護】や【手術室で実施される感染予防対策】について気づき，【手術室看護師に必要な合併症予防の実践】について理解していた．学生が手術見学を通して安全管理や感染管理についての学びを得たことは手術室看護における特徴的な看護援助を捉えた結果であると推察される．一方で，【患者の個別性に合わせた心理的援助】に対する気づきや【患者の不安緩和を目的とした手術室看護師が行う心理的援助】についての理解が示された．手術室看護師は患者の個別性を考慮した看護実践や患者の意思を尊重した看護方法の選択において，専門職の自律性であると認識している[7]．学生の学びの中に個別性のある看護援助について示されていたのは，臨床指導者である手術室看護師が手術室看護の専門性として自らの看護実践を示していた可能性がある．また，学生自身も初めて入室する手術室という特殊な環境の中で行われる看護実践の在り様を注意深く見学したことで患者の個別性を捉えた看護援助について学ぶことができたと考える．さらに，学生は【受け持ち患者の緊張の緩和を目的とした看護援助】として麻酔導入時にタッチングや声かけを行っていた．患者の気持ちに寄り添い，受け持ち患者の個別性を踏まえた心理的援助に気づき，実施できたことは手術室看護の一端を担う一員としての意識を持つことに繋がり，手術室で提供される看護援助に対する学生の学びが

深まったと推察される．

3）手術室看護師の役割・能力

学生は【手術室看護師に求められる役割と能力】についての気づきや【手術侵襲に対応し得る手術室看護師の能力】の理解が得られていた．外回り看護師と器械出し看護師の特徴的な役割だけでなく，臨機応変な対応力や患者の生命を守るという責任感を学んでいた．患者が生命の危機的状況に置かれるという手術室特有の学びであったと推察される．手術室見学実習において学生は単に看護技術というものを超えた熟練した達人としての技，すなわち経験と努力によって培われていく手術室看護師の卓越したスキルを学ぶ[8]と報告されているが，本研究の結果では卓越したスキルだけでなく，手術室看護師に求められる役割や能力についても学んでいた．外回り看護師が学生の指導を担うことで，手術室看護師の役割や能力を幅広い視点で包括的に捉えることができたためであると考える．

4）他職種との連携

学生は【円滑な手術進行と安全を考慮した医療者間の連携】について理解した．また，他職種間の連携を推進する上で【他職種の役割を理解する必要性】や【他職種連携におけるコミュニケーションの重要性】について気づいた．平成22年に厚生労働省より「チーム医療の推進について」に関する報告書[9]が示され，その中にチーム医療の推進及び看護師の役割拡大について述べられている．チーム医療は様々な場面で求められるが，手術室では多くの職種が協働し患者に医療を提供する場であるため，他職種間の連携は必要不可欠である．学生は他職種との連携だけでなく，連携する上での他職種理解やコミュニケーションの重要性にまで学びを得ていた．また，【看護師の連携がもたらした継続看護】として手術室看護師と病棟看護師の連携による継続看護に気づいた．手術を受ける患者を取り巻き提供される医療と看護の継続性について学びを得たことは，周手術期看護という術前から術後のプロセスの中で患者を捉えることができたからであると推察される．

5）術後看護への理解

学生は【手術侵襲による術後合併症の予測と術後看護】について気づいた．手術を受ける患者の様子や手術室看護師が提供する援助から，体位による神経障害や麻痺のリスク，褥瘡好発部位を具体的に気づくことに繋がったと考える．さらに，患者が受ける手術侵襲を直に見ることで侵襲の大きさを実感するだけでなく，手術による機能形態の変化を捉え，術後に必要な看護支援にまで結びつけて考えることができていた．大谷は[10]，患者と共に手術室に入室・退室するという受け持ち患者の手術見学をする実習では術後を踏まえて術中の看護を捉えることができると述べており，術中の患者の様子や手術室で提供される看護援助を踏まえて，自らの立案する術後の看護援助の具体性を見出すことに繋がると考えられる．

6）看護師としての在り方

学生は患者の安全・安楽を守ることや患者の気持ちに寄り添った看護を提供するという【全ての看護に共通する患者を尊重した姿勢】について気づいた．手術室看護師は患者の代弁者であるという思いが，患者の羞恥心への配慮や恐怖心の軽減に努めるという倫理的な行動を促進するという報告[11]がある．このような手術室看護師の看護援助を見学することで学生の看護師としての在り方に影響を与えた可能性がある．学生は実習を通して患者・家族の価値観やニーズの尊重，患者の自尊心の尊重という看護者としての在り方を考えていく[12]ことや看護職としての人格的・倫理的成長につながる[13]ことが先行研究で報告されている．本研究の結果から手術室という特殊な環境だからこそ学生は看護師としての在り方を学ぶことができたと示唆される．

2．教授活動への示唆と今後の課題

周手術期看護の理念とは術前・術中・術後の全期間を通して手術患者に一貫した全人的看護ケアを提供すること[14]である．本研究の結果から，学生は術中看護だけでなく，病棟と手術室の看護師の連携を通して継続看護の必要性を学ぶことができていた．また，手術室看護師の術前訪問が術中看護にどのように活かされているのか，術後合併症のリスクを予測した手術室での看護実践がどのようなものかを見学したことで，周手術期看護として術中看護が術前から術後の看護を繋ぐ看護であることを直に学ぶことができたと推察される．特に，手術室見学実習を通して手術による身体機能の変化に対する生活への影響を看護する必要性に気がついたことは，手術患者に対する全人的看護ケアを検討し，提供する上ではとても大きな学びであると考える．本研究から，学生は受け持ち患者の理解，他職種との連携，継続看護の実際を学ぶことができ，実習目標に沿った学びを得ていたと示唆された．さらに，学生は手術室という特殊な環境であっても全ての看護に共通する患者を尊重した関わりについても気づくことができていた．そのため，周手術期看護実習として手術室見学実習を取り入れることは，学生の周手術期看護の理解だけでなく，看護師としての在り方を培う上では必要であると考える．

A大学では，学生の手術室見学実習に教員は同行していないが，学生は見学したい内容や目標を明確にして実習に臨むことで，手術室看護師から指導を受け多くの学びを得ることができていたと推察される．一方で，学生が実施した看護援助の内容は患者の緊張緩和に向けたタッチングや声かけのカテゴリーのみであった．臨地実習における実施とは，観察したことや既習の知識を想起し看護援助として実践することである．本研究は見学実習レポートを分析したものであり，学生が実施した看護援助の全てを反映した結果ではないが，学生が手術室見学実習での学びを意味づけていくためには，実施した内容を明らかにする必要があると考える．そのため，今後は学生が手術室見学実習で実施した援助内容を明らかにし，実習の学習効果を高めるた

めに見学実習であっても学生の実施可能な看護援助について学習機会をもてるよう臨床指導者と協力・調整していく必要があると考える.

Ⅶ. おわりに

本研究は学生が提出した実習レポートの学びを分析した結果であるため，学生の記述として表現されていないものに関しては分析できていない. また, 学生が記載した理解・気づきの表現と実際が学生個々によって異なる可能性がある．さらに，実習レポートは実習評価の参考にしていることから，実習の到達目標がレポートの記述内容に影響した可能性がある．そのため，学生の学び全てについて明らかにできているとは言い切れない．しかし，本研究の結果から手術室見学を通して学生の周手術期看護の理解が深まることが明らかになっただけなく，看護師としての在り方を培っていくことが見出された．手術室見学実習において学生の能動的意識が体験に意味を与えていく[15]と言われていることから，学生の体験を通して既習の知識と現象を意味づけることができるように学生と共に振り返りを行う機会を設けるなど，手術室見学実習の実習指導の在り方について検討していきたい.

謝　　辞

本研究にご協力頂きました学生の皆様に深く感謝申し上げます.

なお，本研究の一部は日本看護研究学会第43回学術集会において発表した．本研究において開示すべき利益相反はない.

引用文献

1）溝部佳代, 鷲見尚己, 武藤眞佐子：周手術期看護実習における手術室実習の有効性 学生の手術室看護に関する学びと態度の変化より. 看護総合科学研究会誌10：3-14, 2007
2）吉井美穂, 八塚美樹, 安田智美他：周手術期実習における学生の手術に対するイメージの変化. 富山医科薬科大学看護学会雑誌5(2)：103-107, 2004
3）深澤佳代子：看護基礎教育における手術室実習の動向 公立看護系大学の実態調査より. オペナーシング21(2)：208-214, 2006
4）板東孝枝, 雄西智恵美, 今井芳枝他：成人看護学実習における「手術室見学実習観察項目表」を導入した実習の学習効果の検討. The Journal of Nursing Investigation11(1-2)：51-58, 2013
5）北村直子, 奥村美奈子, 兼松恵子他：手術室実習を通しての学生の学び（第2報）学生が捉えた手術室で行われていた看護. 岐阜県立看護大学4(1)：92-98, 2004
6）原嶋朝子, 加藤千恵子, 鈴木タ岐子他：周手術期看護実習の手術見学における看護学生の学習内容. 日本看護学会論文集 成人看護Ⅰ34：12-14, 2004
7）長澤美佐子：手術室看護師の専門職的自立性の特徴 主観的・客観的評価の相違. 日本手術看護学会誌6(1)：39-42, 2010
8）石橋鮎美, 三島三代子, 別所史恵他：成人看護実習の手術見学における看護学生の学び. 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要4：81-89, 2010
9）厚生労働省：チーム医療の推進について（チーム医療の推進に関する検討会 報告書）http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/dl/s0319-9a.pdf, (2017-10-1)
10）大谷則子, 堀之内若名, 中井裕子他：手術室見学実習における学び 二つの実習形態の比較検討による考察. オペナーシング21(6)：662-372, 2006
11）市ノ渡奈津子：手術室における倫理的問題に対する看護師の認識と行動. 日本看護学会論文集 成人看護Ⅰ43：3-6, 2013
12）内藤明子, 佐藤ゆかり, 鈴木里美他：成人看護学急性期実習を通じて学生が考える「看護者としてのあり方」実習レポートの分析から. 愛知医科大学看護学部紀要5：9-19, 2006
13）板東孝枝, 雄西智恵美, 今井芳枝他：手術患者を対象とした成人看護学実習における手術室での学生の学習経験. 日本看護学教育学会誌22(2)：13-25, 2012
14）雄西智恵美, 秋元典子：周手術期看護論. 第1章 周手術期看護の考え方. 第3版. 東京, ヌーヴェルヒロカワ, 2014, p4-30
15）酒井明子：周手術期看護における見学と実習のコンテクストの理論的検討 活動システムモデルを用いて. 福井医科大学研究雑誌1(1)：219-232, 2000